

都市青年による集団形成の意義

—1960 年代から 1980 年代の日本都市青年会議の取り組みに着目して—

大山宏[†]

[†] 東京大学大学院教育学研究科博士課程

本稿の目的は、高度経済成長期以後の都市部における青年の集団形成に、どのような意義が見出されていたのかを検討することである。高度経済成長期以後も、都市青年自身によって集団形成に関する議論が続けられていた組織が、日本都市青年会議市青年会議である。そこで本稿では、日本都市青年会議の記録を基に、都市青年の集団の必要性が当時どのように論じられていたのか検討した。その結果、都市青年による集団形成は社会参加を促進するものであり、青年の社会参加によって望ましい地域像と青年像を構築していく過程として位置づけられていたことが明らかになった。

キーワード：日本都市青年会議，都市青年，集団形成，社会参加

目次

1 はじめに

2 都市化以前の青年集団

- 2.1 「青年」概念の誕生
- 2.2 青年と都市・農村
- 2.3 青年の集団形成への着目

3 都市青年の変化と集団化への欲求

- 3.1 勤労青年の増加
- 3.2 新しい都市青年の実態
- 3.3 青年集団の変化への着目

4 日本都市青年会議とは

- 4.1 設立の経緯
- 4.2 組織の構造
- 4.3 活動の内容

5 都市青年の集団化の理論

- 5.1 日都青の論点と想定される青年集団像
- 5.2 青年による集団形成の目的

6 おわりに

1 はじめに

本稿の目的は、都市部における青年の集団形成にどのような意義が見出されてきたのかについて検討することにある。特に、都市化が進行していたとされる 1960 年代から 1980 年代にかけての議論を主な対象とし、都市青年の集団の全国組織である日本都市青年会議（以下、日都青）を事例として検討していく。

青年による集団形成に関する研究は、前史として位置づけられる若連中、若者組等と呼称される江戸時代以前からの年齢階梯集団に関するものから、青年団の創設期である明治期、青年団の全国組織化が進められた大正期、国家に動員されイデオロギーの問題が噴出した昭和期と、各時期に様々な課題が見いだされ、主に太平洋戦争期までの、青年集団が全国的に組織され展開していった頃に着目した研究が多く存在している¹。また太平洋戦争後の青年集団の動向に関しても、日本青年団協議会（以下、日青協）が多くの記録を残し

ている他、青年集団の取り組みを対象とした研究が数多く進められていった。中でも青年の集団形成とそれによる教育的意義については、共同学習論が日青協の共同学習運動の旗印となり、後々まで大きな影響を現場の実践に与えたものとして位置づけられている²。しかしその一方で、1966年の日青協の報告書に、“青年団員の労働者化が始まったとき、青年団の崩壊も始まった”と記されていることが端的に表しているように³、青年の集団形成の難しさに言及する研究が1960年代以降増加していくこととなり、一般には青年集団の崩壊・解体は、都市化・工業化と関わるものとして論じられることとなる。こうした論調は1980年代にかけてより強まっていき、生活集団から機能集団へと青年集団の質が変化したこと言及した那須野⁴や、未来への期待値の低下による、青年に対する時間的アプローチの有効性の低下が集団離れにつながったとする田中⁵等、青年集団の変化の内容についても様々に言及されていくことになるが、ここでもやはり時代的背景として“経済偏重の「高成長」時代”や“1960年代の高度経済成長時代”について言及されている。つまり、1960年代以降の社会の急激な変化としての都市化が青年のあり方に大きく影響を与え、それによって青年集団が「見えない」「集まらない」ものになった⁶というのが、都市化と青年集団の関係についての主な論調であるといえるだろう。

また、こうした流れを受け、1980年代以降の青年教育は青年集団よりも青年個人を重視する方向へと視点の移していくこととなる。例えば田中(2002)は、集団離れをした後の青年に対する働きかけ方について空間的アプローチに言及し、具体的な事例をあげつつ“集団づくりにこだわらず、「個人」としての子どもや若者の遊びや余暇活動の条件づくりを行うもの”と論じているが⁷、これは青年教育の着眼点が青年によって形成された「集団」から、一人一人の青年という「個人」へと移っていったことを端的に示している。当然のことながら、一定の空間を共有する存在としての仲間づくりという視点は残しているものの、集団が前提として位置づけられるものではなくなったことで、特に新しい都市的な環境下にある青年の集団に対する注目も低下していったことがうかがえる。こうした青年個人への着目は、都市部に流入した青年を地域的なしがらみから逃れ

た自由で自立した個人ととらえる当時の青年観とも深く関わるものであり、都市化の進行の影響を強く受けたものであった。

しかし、都市化した環境の中で生活する青年が形成する集団は、全く存在しなくなったわけではない。むしろ1960年代の頃から、集団就職等によって地方から都市部に出てきた青年たちによって、既存の青年団とは異なる形式の集団形成が求められていたことは、これまでも繰り返し指摘をされているところである。都市の青年は地域の青年会の他に様々なサークルや雑誌の購読グループ、同郷出身者のグループ等、多様な形態で集団形成をしており⁸、一人で複数の集団に所属していることも少なくなかった。那須野(1976)は“昭和三〇年ころには、日青協会員が約三〇〇万人、グループ・サークル会員が五〜六万人、それにたいして昭和四五年ころには、前者が五〇〜六〇万人、後者が約三〇万人”と推定しているが⁹、この数値からも都市部における新しい集団に所属する青年が、この時期に急激に増加していたことがうかがえるであろう。当時の通説として“青年団はもう歴史的遺物だ。(中略)いわばねぐらにすぎない地域に集団をつくる意味などは全くない”と言われていたとされるが¹⁰、実際には都市青年の集団は、それまでとは異なる形式で活動を継続していたというのが実態であろう。

また、青年自身による集団形成への渴望は現代でも指摘される場所であり、例えば久田はコンビニの前や公園の片隅にたむろする子どもや若者について“彼らは、孤立しているわけではなく、そういうところ集まっているのである”と論じ¹¹、青年のための空間が制限されている現代社会でもどうにか仲間と集まろうとする青年の姿を描き出している。こうした青年のつながりは、組織化せずに自由で緩やかなつながりとなっている点で1950年代のロハ台研究で描かれた青年像にも通じる部分があるだろう。都市化が進行した1960年代から現在に至るまで、青年たちにとって集団形成や仲間とのつながりが一定の意味を持つものであり、都市空間の中でどうにかして仲間を見つけようと奮闘する青年たちの姿が認められるのである。

1960年代以降から現在に至るまで、都市化の文脈の中で、地域のしがらみから逃れた自由で自立した存在としての青年像と、都市空間の中で孤立しつながりを求める存在としての青年像とい

う、二つの青年像が成立してきたといえる。都市青年の集団形成は、この二つの青年像の接点をどのようにして見出し、都市空間における青年の立ち位置をどのように想定するかという課題を提起するものだったと考えられる。しかし、そうした都市部における青年たちの姿は、これまであまり目を向けられることがなかったのではないだろうか。本稿はこういった課題意識の下、まず都市青年たち自身が自らの取り組みをどのように位置づけていたのかを明らかにするため、日都青の取り組みに着目するものである。

本稿で対象としている日都青は、1950年代の活動を基盤としながら1969年に発足し、その後今日に至るまで活動を継続してきた都市青年の全国組織である¹²。都市化が進行する社会の情勢を背景としながら、都市青年自身が自らの取り組みを社会的に位置づけようとして作られた組織であり、日本全国から参加者が集まる大規模なものであった。そのため、日都青における議論を概観することで、都市青年の集団形成について、社会的にどのような意義が見出されていたのかを明らかにすることができるのである。また、日都青は歴史もあり組織も全国的に展開している大規模なものであるにも関わらず、これまでほとんど研究の対象とされてこなかった。これは青年に関する全国組織としては、より大規模な日青協の存在があったこと、当時都市青年の集まりという政治的な色彩を持つものとして認識されていたこと等が理由ではないかと考えられるが¹³、現在に至るまで日都青の取り組みに関する総括は行われていない。そのため本稿は、日都青の取り組みについて整理することも試みるものである。

以上のことから、まず第2章では青年概念の歴史を振り返りつつ、都市化が進行する以前には青年による集団形成がどのように位置づけられるものであったのかを検討する。青年という概念が登場した頃に、山本滝之助が著書『田舎青年』の中で、都市部の書生に対置する形で田舎に暮らす青年たちを位置づけようとしていることに見られるように、青年概念にとって「都市—農村」という地域差と、そこに存在する様々な格差は当初から無視し得ないものであった。また、山本は青年集団のポジティブな教育力に着目した人物としても位置づけられており¹⁴、青年の集団形成もこの時期から議論されるようになったと考えら

れる。第2章では「都市青年」と「集団形成」という、本稿における主要な二つの概念について、初期の議論でどのように位置づけられるものであったのか、またその後どのように論じられてきたのかについて概観する。

第3章では、戦後初期から高度経済成長期にかけて、農村部から都市部に青年が流れ込んだことによる都市青年の内実の変化について言及し、その中で青年による集団の位置づけがどのように変化していったのかについて論じる。先述の通り、1960年代以降の都市化によって、青年たちの生育環境は大きく変化し、青年によって求められる青年集団のあり方も移り変わっていったと考えられる。こうした、都市化によって生じた青年集団の特徴や課題を把握するためには、まず当時の社会がどのように変化し、その中で青年たちの社会的な位置づけがどう変わっていったかを把握する必要があるだろう。

第4章では、本稿で主要な対象としている、日本都市青年会議の設立過程や主な活動の内容について概観していく。日本都市青年会議は1969年に第1回が開催されているが、その前身となる五大市青年団体協議会は1953年に設立されており、さらにそこに至るまでの都市青年の取り組みは、1925年の大日本連合青年団発足の際から言及されてきている¹⁵。また、日本都市青年会議設立後は年に一度全国大会を開催し、全国から青年が集まって議論・交流を重ねている記録が残されている他、1977年からは指導者研究協議会、1994年からは青少年担当行政職員セミナーと、対象やテーマを絞り込み、全国大会から派生する形で取り組みの幅を広げてきているため、そこでの議論の内容をまとめていく。

第5章では日都青でどのような議論が為されており、そこでどのような青年集団が想定されていたのかを検討していく。サークル等新しい集団の形式が広まっていく中で、それまでの地域青年団に比べて、大きく二つの特徴が指摘されている。一つは地域社会とのつながりの希薄化であり、もう一つは全国規模の組織との一体化の難しさである。こうした課題に対し、日都青がどのように応えようとしていたのかの検討を通し、都市青年の取り組みが社会的にどのように捉えられていたのかを考察していく。

2 都市化以前の青年集団

2.1 「青年」概念の誕生

青年という言葉は、時代によって様々な意味を付与されながら用いられ続けてきたものである。そのため、都市青年について検討するために、まず青年という言葉の用いられ方について概観する必要がある。

江戸時代以前にも、使用された数は少ないが、青年という単語は存在していたという指摘もあるものの¹⁶、明治の初期までは「青年」といえば「若い時」「年齢が若い」といった意味で使われており、「若い者」として青年の語句を最初に使ったのは、1880年に Young Men's Christian Association を「基督教青年会」と訳した小崎弘道だとするのが通説である。また、青年会という名称だけでなく、YMCA が目指したキリスト教による近代的な自我の確立という思想は、以後の青年集団に大きな影響を与えたとされる¹⁷。それまでは若い者を表す語句として、「わかもの（少年）」や「わかうど（後生・壮佼）」といった言葉が別にあり、しかもこうした言葉には血気盛んな者や何らかの意味で大人になれない者といった、特に明治期以降は否定されるようになった性質が含意されていた。

現代の用法に通じる意味で「青年」という言葉を最初に用いたのは徳富蘇峰だとされるが¹⁸、徳富の以前から青年という言葉は急激に広まりつつあった。1880年に小崎が東京基督教青年会を結成した後、青年に関する様々な雑誌が発行されるようになっており、同年創刊の東京基督教青年会の機関紙である『六合雑誌』をはじめ、自由党系の団体が1882年に創刊した『青年自由党雑誌』、茨城県の下妻で結成された常総青年会が1887年に創刊した『常総の青年』等、様々な団体から青年（会）に関する雑誌が発刊された¹⁹。徳富が1887年に『国民之友』を創刊し、また『新日本之青年』を著したことは、こうした青年に関する論調の高まりの中に位置づけられる。

『新日本之青年』は、1885年に徳富が熊本の私塾である大江義塾で行った演説が基となり、後に出版されたものであるが、そこでの主張は“時代の転換の宣言、「未来ノ世界」を知りうるのかという問いかけ、未来を担う次世代として「青年」を前面に押し出し、その重要性を強調すること、

そしてその「青年」を教導する「教育」の役割の重大さを訴えること”という、非常に未来志向的なものとして概括される²⁰。つまり徳富にとって、青年とは時代の転換点にあって、未来の新しい社会を担う存在として位置づけられる存在なのである。こうした姿勢は『国民之友』の巻頭にある“旧日本ノ老人漸ク去リテ新日本ノ少年將ニ来リ、東洋的ノ現像漸ク去リテ泰西的ノ現像將ニ来リ、破壊的ノ時代漸ク去リテ建設的ノ時代將ニ来ラントス”という一文からも読み取ることができ、旧日本と対置する形で、圧倒的に善なるものとして「新日本」という概念を置く二項対立図式が、未来志向の「青年」像を支えていた。

そして、この未来志向の「青年」像の内実については、「旧日本・東洋的・破壊的—新日本・泰西的・建設的」という二項対立図式の中に位置づけられたことで、新日本の建設に必要なだと考えられていた西洋近代精神と深く結びつけられていたことがうかがえる。これについて北村は、福澤諭吉からの影響に言及しつつ、近代の精神が“心に感じたものごとを、言葉を媒介にして表象化し、議論という手続きをへて「知識」へと編成すること”を重要視するものであったとし²¹、個々人の内側で働く近代の精神を「表象機械」と表現している。そして自己の存在や目的が表象され鮮明化することで可能となる、合理性・合目的性こそが、西洋近代精神の特徴であり、近代国家の基盤としてその形成が急務だと認識されていたことを指摘している。

ただし、ここで指摘される合理性・合目的性とは、西洋的な近代社会・国家の確立へと収斂していくものであり、生活の糧を求めめる身体としての自己や、生身の存在の欲求は、そうした近代的な理想の社会・国家の実現を阻むものとして位置づけられることもあった²²。言い換えれば、合理性・合目的性は、個人的な立身出世などとは切り離されたものとして、国家や社会の発展に資する行動へと青年を駆り立てるものでもあったのである。青年の役割とは即ち、自己を含めあらゆる物事を表象する能力を得ることで、合理的・合目的な近代精神を獲得することであり、それによって近代的な「新日本」としての社会・国家の実現に寄与することであった。

2.2 青年と都市・農村

徳富の論は“書生を社会革新の原動力とし、明治維新を遂行した志士たちを「天保の老人」として、世代交代を主張したものであった”とも評される²³。ここで注目すべきは青年として位置づけられているのが「書生」であり、したがって初期の青年像とは“近代化の先頭を行く都市、とくに東京に地方から立身出世を夢見て上京してきた若者たちは学生・書生となり、かれらが有意の若者として新たに「青年」という概念をつくり出した²⁴”ものとして認識されていたことである。1890年代から1900年代にかけて、青年の心理を主題化した青年小説が数多く執筆されているが、その中にも地方から上京した青年が主人公となっているものが数多く存在していることから、一般的な認識でも青年概念において書生が重要な位置を占めていたことがうかがえる。

こうした都市部の書生らに限定された青年像に対し、農村に住む青年という新しい青年像を提示したのが山本滝之助であった。山本は1896年に『田舎青年』を著したが、その中で上流社会の相続者である「学生」と社会に見捨てられて田舎に縮小する「田舎青年」を対置し、この二つの平等を主張している²⁵。山本は“青年の青年たる所以のものは心にありて形にあらず、区々たる学術技芸にあらずして精神気象にあり（中略）所謂精神気象とは天授の特性を謂ふものにして（中略）学ふと学はさるとは其特性を發揮するに際して多少の便宜を異にするは論無しと雖とも、学びて初めて其特性を作り得るにあらず”と論じ²⁶、学問を修めることが有意義なことであることは認めつつ、それが青年を青年足らしめることと同義ではなく、田舎に居住する青年であっても特性を發揮することで青年足り得るのだとしているのである。

ただし、山本が主張する田舎青年とは、“漠然と田舎に住む普通名詞の意味での青年ではなく、（中略）小学校の准教員や役場の写字生などの村の若い知識階級”であったという指摘もある²⁷。農村における階級や職業の違いに山本がどの程度注目していたかは明らかではないが、実際に山本は『田舎青年』を執筆した意図として“期する處は田舎青年の猛省を促し”と書き、何事も為すことなく年齢を重ねる多くの田舎青年に対する課題意識を鮮明に表しており、田舎青年の奮起を

促している。そして目指す方向として提示されるのが合理性・合目的性であり、“何事を捨てても、先づ第一目的を確定せざる可からず、而して目的確定したる上は、一挙手一投足、始終之れを離れず、日常千百の動作、皆是れを達する所以の方便たらざるへからず”と論じ、近代精神の涵養という都市と共通の課題に、農村で取り組む姿勢を鮮明にするのである。

こうした山本の主張からは、近代的な「新日本」の確立を目的として据え、その原動力として「青年」を位置づけるという、目指すべき「青年」の姿は共有しながらも、階級や生活環境の違いによって都市青年（書生）と農村青年（田舎青年）という二つに明確に区分されてしまっていた初期の青年像が浮かび上がってくる。言い換えれば、都市青年・農村青年という区分は、その地域においてどのように近代精神の獲得を目指すかという実践的な問いから、必然的に生じてきたものであったといえるだろう。

2.3 青年の集団形成への着目

先述の通り小崎が1880年に東京基督教青年会を発足させたことを皮切りに、1890年代頃から多種多様な青年集団が全国に発足している。木村はそれら中小規模のものも含めた青年集団について、それぞれの青年集団が発行していた雑誌の分析を通し、都市で組織されたのか、農村で組織されたのかといった区分を用いて分類している²⁸。この区分を基に、都市と農村という視点から青年の集団形成のあり方について検討していきたい。

まず、都市青年によって形成された集団の初期形態がどのようなものであったのかについて、木村は“一般的には学校や塾に通っている書生たちによって結成されたものであった”としている。そこでは演説会や討論会が行われていた他、都市の知識人と緊密な関係を結ぶものが多く、書生たちにとって有力者と縁を結ぶ場としても機能していたと考えられる。こういった書生たちによるサークルの描写は、夏目漱石や森鷗外をはじめとした文豪らの青年小説中にも度々登場するが、彼ら自身がサークルに参加していた記録も残っていることから、自らの実体験を基に描写したものと考えられ、例えば森鷗外の『青年』の中では、地方から上京してきた青年が同郷の友人に連れられて青年倶楽部に参加する様子が描写されて

いる。しかしそうした倶楽部は書生らが参加したいときのみ参加するものとして描かれ、特に帰属意識のようなものはうかがわれない。こうした描写からは、都市部における青年集団は、書生らにとって交流や議論の場であり、また社会的に地位のある人物とも出会うことのできる社交の場として機能していたと考えられる。ただし、集団を形成しようとする意図や、集団であることの意義についてはほとんど語られておらず、あくまで有意の書生らが独自に集まっていたというのが実態であったのであろう。

一方で、地方において組織された青年集団としては、1880年代後半から一村一字単位の小規模な範囲で結成されたものが広まっていくこととなるが、代表例としてあげられるのはやはり山本の実践であろう。山本は青年による集団形成のポジティブな教育力に注目した存在として²⁹、青年集団の発展においても重要な役割を果たしている。逆に言えば、山本以前の青年による集団は、その多くが肯定的に評価されることのないものであったといえるだろう。

青年会や青年団の前史として位置づけられる、江戸時代以前の村落にあった若連中、若者組等と呼称される年齢階梯集団にしても、祭りの神輿担ぎや、夫役を担当するような村人足等、集落にとって不可欠な役割を担っていたものの、違う集落の若者組との間で喧嘩を引き起こす等、様々な問題もあったため、各藩や幕府にとっては世を乱す異分子として位置づけられていた面があり、各藩が別個に取り締まりをしていた記録が残されている³⁰。若者組を肯定的に評価し、青年団の前史として積極的に位置づけるといふ言説もあるものの、そうした評価は田澤義鋪によって1930年に刊行された『青年団の使命』以来のものであり、そこには“元来リベラルな内務官であった田澤らの青年団指導者に青年団の軍事利用に抗する意図があった”とされ³¹、若者組が教育的なものとして位置づけられたのは、後年の言説によるものであったと結論付けられる。

また、明治期に入ってから、先述の通り近世以来の「わかうど」的な気質は批判の対象となる傾向があり、若者組もそれまで担ってきた警備や人足の役割を公共団体が担うようになるにつれ、社会的機能の喪失とともに徐々に衰退していったとされている³²。同時期には青年心理学も盛んになり、主要な論者は集団心理に関心を寄せてい

たとされるが、その際には集団の持つ、理性を弱め感情的に巻き込んでいくというマイナス面が主に問題化されており³³、やはり集団の影響をポジティブに捉えるには至らなかった。

山本も若者組の存在には注目しており、青年会について言及する際に“其名目あるは、近來の事なれども、其実は曾て封建の昔より備はれるなり”と³⁴、青年会の前身となった団体があったことを示唆している。しかし、近世以前の若者組は先述のように問題も多く、山本が“国家の中堅となるべき田舎青年を若連中の墮落した世界からどのように救済するか”という課題意識も持っていたことが指摘されるように³⁵、若者組そのものを肯定的に捉えてはいなかった。このことから、青年集団の形成という現代につながる課題の起点を、山本に求めることができると考えられるだろう。

青年集団に対し山本は、農村青年が理想に向けて様々な取り組みを継続・発展させていくために不可欠な意志の力を涵養するために、集団形成が有効である、という視点からその有用性を主張していく。“例へば一人のみでは中々困難な『衣服は綿服に限る事』も団体申合せとあれば決して行なはれぬことはない、一人のみでは大儀な寒中の冷水浴も多数列つてならば面白いばかりだ雑作はない、こゝが即ち各自に団体の意力を借用してゐる所である”とし³⁶、感情的に巻き込まれ意志を操作してしまうという、ともすれば短所ともなり得る点を、集団形成の長所として論じているのである³⁷。したがって山本にとっての青年会は、青年が相互に意志を涵養し合い、近代精神を培っていくための一種の研修機関としての側面を持つものであり、その役割として“青年相集ひて一の団結を作り、相互に注意、忠告、扶掖、提携、奮励、精研する”ことがあげられることになる³⁸。山本にとって、青年集団の形成は、いかにして青年たちに近代精神を植え付けるかという課題意識と不可分に結びついたものであった。

先述のように、当初は都市青年とは書生を指す言葉であった。書生らは独自に議論の場を設け、集団を形成していたものの、帰属意識は薄く、集団形成そのものが課題として意識に上がることもなかったのであろう。その意味では農村青年を対象としながら、山本が青年会という形で集団形成を課題化したことは、青年集団論という視点からは画期的なことであった。

また、山本の取り組み以後は政策的にも青年集団に注目が集まるようになる。青年会の活動は、その後日清戦争・日露戦争時に銃後活動を展開したことで世間の評価を得ることとなり、軍部からも注目されるようになる。大正期に入ると政府の主導で青年団の全国組織化が進められるようになるが、これを主導したのは陸軍であり、その目的は戦争に備えての青少年の訓練であったとされる。思想善導の名目で青年の思想に介入しようとする政府に対し、青年団内部からは自主化の運動が起こり、長野県を中心に運動が行われるが、その後昭和初期には戦争へと向かう国家的な流れの中で終止符を打たれることとなった。こうして太平洋戦争終結までの間、青年集団は軍部と密接な関係を持つ形で政策の中に位置づけられることとなる³⁹。

また、日本における青年概念の起こりに、小崎による基督教青年会の設立が大きな影響を与えていたことは先述の通りであるが、欧米の青少年集団はその後も日本の青少年集団のあり方に大きな影響を与えるものであり続けた。政府による青年団の組織化が行われる際には、陸軍の田中義一が欧米各国の青少年教育の実情を見聞しており、中でもドイツ青年団とイギリスのボーイスカウト運動に感銘を受けたとされており、その後の日本における青年集団に関わる政策展開にも少なからず影響を与えたと考えられる。

3 都市青年の変化と集団化への欲求

3.1 勤労青年の増加

青年という概念が登場した当初は、都市青年といえば書生のことであるとされていたが、都市青年の実態は、その後大きく変化していくこととなる。産業革命によって工業化が進み、農村から都市に流入して賃金労働者化する青年が増加したのである。こうした青年たちについては、1901年に徳富愛嶂が『逆境之青年』を出版して言及する等、早い段階から注目を集めていた。また、東京の人口は1895年には140万人であったのが、1912年には市内人口だけで262万人に達し、通勤ラッシュが起きるほどになっていたとされる⁴⁰。ここに勤労青年という、新しい都市青年のカテゴリが生まれることになるのである。勤労青年教育

のための場として、実業補習学校や青年訓練所が設けられ、さらに1935年にはそれらが統合され青年学校が発足する等、国策としても勤労青年教育は行われており、1943年には青年学校の生徒数は300万人を超えたとされる。

しかし、勤労青年の問題が一般社会でも大きく注目されたのは、太平洋戦争後の復興から高度経済成長期にかけて、特に1960年頃からのことであろう。矢島正見が雑誌『青少年問題』を題材としながら“昭和30年代、地方から大都市に就職する勤労青少年が大量に生み出され、大きな文化現象ならびに社会問題となった”と指摘するように⁴¹、産業革命時に生まれた勤労青年というカテゴリは、再度都市化と工業化を急速に進めることとなった高度経済成長期に、急激に拡大し注目を集めていくこととなる。

実際にこの時期の東京区部の、年齢別の人口を見ると、15歳以上20歳未満の人口は1950年には約56万人だったのに対し、1955年には約79万人、1960年には約110万人と、急激に増加していることがわかる⁴²。矢島は1963年のデータを用い、“この時代、東京にいる青少年の4人に1人は流入勤労青少年だった”と述べているが、だとすれば1960年頃には20万人を超える勤労青少年が地方から東京に集っていたことになる。東京以外にも、六大市とされる横浜・名古屋・京都・大阪・神戸の各市で、1950年から1960年の10年間の間に15歳以上20歳未満の人口は急激に増加しており、都市によっては2倍以上となっていることから、相当数の青年が都市部に流入していたことがうかがえるだろう。また大規模な都市ではなく、その周辺に位置する郊外部に移り住み、都市に通勤する青年も多かったとされ、東京都小平市では工場の誘致と都営団地の建設の影響もあって、1945年から1965年の20年間で、人口が8倍になったという記録が残されている⁴³。

こうした人口流入の背景としてあげられるのが、農村の過剰人口問題であり、相続する土地のない次三男の存在であった⁴⁴。また、都市部では産業構造の変動を伴う経済活動の拡大が起き、大規模な工場の進出によって大量の労働力需要が生み出された。こうした都市部と農村部の双方の事情が噛み合い、農村から都市への大量の人口流入が起きたのである。

3.2 新しい都市青年の実態

急激に増加した流入勤労青年は、地縁や血縁という地域性のしがらみから解放された自由な人々たちとして論じられる存在であったが、その一方で生活の実態は非常に厳しいものであったとされる。1954年以降、地方から大人数でまとまって都市部に就職に来る集団就職が広まったが、そうした都市にきた青年たちは頻繁に離職・転職を繰り返したのである。1963年に日青協が行った都市青年に対する調査によれば、中卒青年の6割以上が仕事にはりあいを「あまり感じない」か「全然感じない」と回答し、全体の5割弱が転職を希望するという結果が出ており⁴⁵、勤労青年の多くが一つの職場に留まることに魅力を感じていないことがわかる。これについて菊地は、1963年に宮城県から集団就職で東京に働きに出た約40名の、その後の10年を辿ったところ、一度も転職しなかったのは2名だけであったとする雑誌の記事を引用しながら、“都市部の新卒者を優先する採用環境の中で、集団就職は人気のない分野や職種、零細な事業所へ、地方の少年少女を送り込む装置として機能した”⁴⁶であり、“離職・転職は、こらえ性のない若年労働者たちの浮ついた行動ではなかった。それは割の合わない労働に展望を失った者たちの、ぎりぎりの反抗だったのである”と結論付けている⁴⁶。また、転職のたびに居住地域を変える青年も多く、一度地元に戻ってから別の都市へと再び就職して出ていく者も存在する等、極めて流動性が高かったことも、流入勤労青年の特徴の一つとして上げられるであろう。

こうした厳しい職場の環境を強いられた流入勤労青年たちは、職場の中で疎外感を感じることも多く、また高い流動性故に地域とのつながりも希薄になりがちで、都市の中で孤立していくこととなる。そしてその孤独感への対処として、今度は余暇を共に過ごす存在としての仲間を求める声をあげ始めることとなる。1958年に集団就職で都市に出てきた青年の記録には“同級生一〇名と一緒に集団就職列車で上京した。(中略)従業員が三人で、いずれも年上だというのも淋しい。言葉にも劣等感を感じた。初めの三カ月は、一緒に上京した同級生に電話をかけ、手紙をもらってなんとか慰めたが、それもそのうちに断ちぎれてしまった。休みの日には、とにかく外へ出たかった。しかし、ひとりではつまらない”とあるが⁴⁷、

この記録には職場に馴染めず次第に孤立していく様子が鮮明に綴られているといえるだろう。この“ひとりではつまらない”という感情の発露が、次第に都市青年による集団形成につながっていくのである。日青協の調査報告書においても、特に地方から都市部に出てきて中小企業等で働く青年たちについて、“友達や、集団活動を求めている。中小企業の厚生施設の不備、文化活動・体育活動等が企業内で行ない得ない条件のもとに彼らの意識は外に向っていくのである”と記述されており⁴⁸、特に地方から出てきた青年たちにとって、都市の寂しさが仲間探しに向かう要因として働いていたことがわかる。

ただし、一つ留意すべきこととして、流入勤労青年の数は確かに急激に増加していたのだが、それでも都市部に生まれ育ってきた青年や、高等学校に進学している学生等、異なる背景を持つ青年も多く存在していたことがあげられる。このことにより、同じ都市で暮らす青年たちの間に、お互いの姿が目に見える格差が出現することになったのである。“同じ都市空間の中で、一方には、集団就職の労働者や住み込み定員がおり、もう一方には、不自由なく高等教育を受け、高給を取るホワイトカラーの職へ就く者がいる”という状況が生じたことで⁴⁹、都市青年という同一のカテゴリで総括することがいかに困難になったかは想像に難くない。例えば日青協は都市青年の調査を行う際に、“中卒青年・定高生・全高生という三者の関係をつねに念頭におくようにつとめた”⁵⁰としているが⁵⁰、それも多様化した青年たちの、特に学歴による格差に対して注意を払っていたためであろう。

3.3 青年集団の変化への着目

階層や学歴によって分断された存在として都市青年を捉えると、都市青年の集団形成という観点からは、必然的にどのような都市青年を対象とするか、また異なる背景を持つ青年同士のつながりをどのように構築していくことを想定するのかが問われることとなる。そしてそのために、多種多様な背景を持つ青年集団が設立され、青年たちはそれらのどれかに、または複数の集団に所属し、都市における仲間を探すようになっていく。

実際に、都市青年の内実が多様化すると、ほぼ同時に青年集団も多様なあり方を示すようにな

っていった。例えば日青協が名古屋市南区で行った調査の記録では、青年集団の種類を、職場内のもを設立母体別に三種類に分類した他、職場外の集団を地域青年会、地域のグループ・サークル、宗教関係の青年会、青年同盟、雑誌の読者グループ、成人学校・青年学級の同窓グループ、中学・高校の同窓グループ、同郷出身者グループ、その他の九種類に分類している⁵¹。また、別の報告書では大都市の青年の集団の現状として、地域を基盤とする青年集団、職域を基盤とする青年集団、グループ・サークルの三つに大きく分類し、こうした多様な集団が成立した背景として、流入青年の流動が自由で激しいため、地域への帰属意識や住民同士の共同意識が極めて薄いことをあげている⁵²。自由であり、かつ孤独でもある、この時期の都市青年のあり方を踏まえれば、青年個々人の興味や関心を基盤にしつつ、都市生活の中で感じる孤独感に対処しようとしたため、青年集団が多様化していったのだということになるだろう。

言い換えれば、青年は孤立した都市生活の中で強い孤独感も味わっているため、自己回復のための試みの一環として仲間づくりや集団形成が位置づけられているのであるが⁵³、これは、単に青年が集団を形成する際の受け皿が増えたということ以上に、青年集団の必要性が、社会的な側面からではなく青年個人の生活の充実といった側面から論じられるようになったという点において、青年集団論にとって重要な意味を持つ事柄である。つまり、明治期の「近代精神」以後、青年集団の組織化の際に前提とされてきた、地域や社会、国家といった価値から青年集団が切り離され、青年個人の内発的な動機付けによって集団が形成されるととらえられるようになったのである。しかし、都市部における青年集団の必要性が、都市青年の感じる孤独感に対する自己回復という点からのみ論じられるのであれば、青年集団は地域や社会、国家といった大きな概念に接触する必要性を持たず、また青年集団同士が連携をとる必要もなくなってしまふ。“人間らしく生きたい”といった願いであり、人間らしく生きられない現状への救いを求めた叫び”を本質とし、しかし“地域社会と、直接の結びつきをもっていない、地域性をもっていない集まり”であると認識されるサークルに⁵⁴、多くの青年が集まっていたという事実は、“人間らしく生きたい”という願い”の内実が青年個々人で異なるものとなったことで、集

団を形成する際に共有されていた価値が失われ、青年自身にとっても地域や社会、国家と自身の関係性が意識されにくくなっていったことを端的に示すものであろう。

日青協が都市青年の集団形成について、“特にたいせつなことは、青年集団に対する理念の確立と実践的方法論の開発である。生活条件が複雑化し、青年の欲求が多様化するのに対応して多様な内容・方法がとられるのは当然であるが、それは単に青年の欲求に応じた多種類のプログラムを用意するだけではない。(中略)多様化の方向で考えるとともに、青年集団共通の基本的問題が徹底的に究明されなければならない”と論じるのも⁵⁵、こうした青年集団の変化と、それによる青年集団と社会との接点の縮小に対する課題意識によるものであろう。しかし同時に、日青協のこの記述は青年集団共通の基本的問題が、この時期には明確には見出されなくなっていることを示すものでもある。初期の「青年」概念における「近代精神」のような、広く青年一般に関わり、また青年と社会を結び付けていたような理念が、この時期には存在しなくなっているのである。

日青協による、この時期の都市青年の集団形成に対する課題提起は、集団の中で共有される価値、言い換えれば青年が目指すべき人間らしい生き方とはどのようなものかを問う「理念」の問題と、どのようにして異なる背景を持つ青年同士を結び付けるかという「実践的方法論」の問題の二つが主な論点となっていると解釈できる。これについて、次章以降では都市青年の全国集団である日都青を対象とし、検討していきたい。

4 日本都市青年会議とは

4.1 設立の経緯

日都青は都市青年の研究交流のために1969年に発足した団体であり、したがって先述のような1960年代の高度経済成長期に存在した青年集団のあり方を前提とし、なおかつその全国的なネットワーク化を志向して取り組んだ団体である。日都青の設立から初期の取り組みについては、日都青が1999年に発刊した『都市青年団体活動読本』に最も簡潔にまとめられているため、まず日都青がどのような経緯で設立されたのかを『都市青年

『団体活動読本』をはじめとする各種資料を用いて概観する。

日都青の前身となる五大市青年団体協議会は、青年たちの“より充実された自己の人間形成と、明るい民主的な社会を築くため（中略）日歩みの中から活動を推し進めていく確固たる理論と整備された組織の確立”が必要であるという課題意識により⁵⁶、1953年に横浜・名古屋・京都・大阪・神戸の五つの都市の青年が横浜市に集まり、大都市に共通した悩みや問題について相互学習の機会を設けたことがきっかけとなって発足することとなった。

このとき都市部の青年だけで集まったのは、都市において特に青年団体活動の難しさが指摘されていたということもあるが、何よりも既存の青年団体の取り組みに対して、都市青年自身が不満を抱いていたということが大きいであろう。1963年に発行された神戸市青年団体協議会機関紙「青年神戸」には、“日本青年団協議会は、日本の唯一の青年団体組織の総本山ではあるけれども、それらの内容を見る時に、農村を主体にするものであり、（中略）日本の中で、五大市の青年団体を無視して都市を語るわけにはいかない。少なくとも五大市の意見なり、五大市の内容を良く理解して、その中で日青協が都市の考えを発表するのであればうなずけるが今日までのあり方ではそれは望めない”とする記事が掲載されている⁵⁷。当時日青協も都市青年の問題について調査を行う等、決して都市青年に目を向けなかったわけではなかったものの、都市青年自身は日青協の対応に対して不満を抱いていたことがうかがえる。

また、こうした不満が出ることから、都市には農村とは異なる固有の課題があり、農村中心の観点では都市の問題を捉えきれないのではないかと、都市青年自身が危惧していたということがわかる。その都市固有の課題とは、「青年と社会参加」と考えられており、1969年の第1回大会以後も、一貫して討議されてきたテーマであるとされている⁵⁸。特に都市部においては、社会環境・生活環境の悪化に伴い、青年の社会的地位が認められなくなっている、あるいは青年の社会参加が拒まれていると、都市青年自身が感じており、そうした現状に対しどのように社会参加の道筋を見出していかかが主要な論点となっていく。これを都市における青年集団のあり方と重ねると、青年個人の内発的な動機付けによって組織され

るようになった青年集団を、その自由なあり方を残しつつ、青年自身の手で社会に再度結びつけようとする取り組みであったと言える。

こうした意見を背景として、1967年頃から五大市だけでなく都市青年が一堂に会して話し合う場をもとうという声が、都市青年自身の中から出されるようになる。また、大阪万博という世界規模のイベントが開催される時期であったこともあり、五大市青年団体協議会に東京と北九州市をあわせた七大都市が中心となって、万博にあわせて1969年に都市青年が集まる機会を設けようということになったとされる⁵⁹。こうして開催されたのが、日本都市青年会議第1回大会であり、全国の25都市から参加があった。

以後、1971年に第2回大会を京都で、1972年に第3回大会を東京で開催するに至るが、ここで組織の運営において大きな課題となったのが、財政的裏付けの無さであった⁶⁰。この問題に対処するため、後に日都青の初代会長となる小西義行らが文部省に日参し、補助金の交付を求め、文部省からは補助金交付のために提示された条件に応じる形で事務所の設置や規約の制定等に取り組んだことで、次第に組織が確立していくこととなる⁶¹。特に第3回東京大会は、全国32都市から190名余りの参加者があり、組織としての日都青の方針が決定される等、重要な大会となり、これらの取り組みを受け、1973年の第4回名古屋大会からは文部省の補助金も交付され、以後は安定した組織運営が可能となったとされる。実際に、1984年度の団体予算を見ると、全体の収入約757万円のうち、文部省その他からの補助金が460万円となっており、いかに補助金の存在が大きいかがわかる⁶²。

また、活動の幅が広がるにつれて、1973年からは海外の青年の事例を訪ねる海外研修が、1977からは交流も重要なテーマである大会に対し、より研究・学習に主眼を置いた場として都市青年指導者研究協議会が開催されるようになり、初期日都青の主要な三事業が確立されることとなった⁶³。

4.2 組織の構造

日本都市青年会議の組織構造の骨子は、先述の第3回東京大会の際に、以下のように決定されたことが基になっていると考えられる。

1. 日本都市青年会議は中央集権ではなく、各都市に主体性を持たせた地方分権的組織とする。
2. 全国的横断組織とする第一ステップとして、ブロック化をはかりまずブロック内各都市が情報交換や日常活動を通して組織化をはかる。そして、全国大会は各ブロックの中心都市が持ち回りで主管し開催する。
3. 青年活動が農村中心から都市中心への過渡的段階にあることを考え、加盟については二重加盟も認める。また、日本青年団協議会とは相互に連絡調整をはかりながら協調の道を見いだす。
4. 組織に柔軟性を持たせるため加盟都市が本会事業に参加しない場合でも除名措置はとらない。
5. 具体的な組織化のために、役員都市の副会長クラスで構成する組織委員会を作り、組織化へのスケジュール、規約等の原案を作成し順次加盟を呼びかけていく⁶⁴。

文中に日青協への言及があることからわかるように、日都青が設立されるまで日本で唯一の青年団体の全国的組織であり、また歴史の長さでも会員数でも遥かに巨大な組織であった日青協の存在は、日都青関係者にも常に意識されていた。実際に、1984年度の段階での日青協と日都青の会員数を見ると、日青協が約120万人とされているのに対し、日都青は約21万人となっている⁶⁵。さらに、事業等に参加しなくても構わないという体裁を日都青がとっていたことを考えると、実質的な会員数はさらに少なくなるであろう。一方で組織の構造という点では、中央集権ではなく地方分権的組織とすると明記しており、日青協を頂点に、都道府県レベルの組織が置かれ、その下に単位青年団が位置づけられるという、日青協の組織構造とは異なる点を強調している。日青協を意識しつつ、どのように差異化を図るかを模索していた様子もうかがえるであろう。

これに対し、日青協側はほとんど反応を示さなかった。日青協の半世紀にわたる取り組みをまとめた『地域青年運動 50年史 つながりの再生と創造』には、日都青についてわずかに“七二（昭和四七）年には都市青年対策のために日本都市青年会議との連携を試みるが、都市青年会議と日青

協への二重加盟問題などが表面化し、日青協は将来にわたって連携できる組織ではないと判断、七三（昭和四八）年には日本都市青年会議への後援を見あわせた”とする記述があるのみであり⁶⁶、結果として日青協との連携は叶わなかったことがわかる。連携ができなかった理由として日青協は二重加盟問題をあげているが、日都青側は二重加盟も織り込み済みであったこと、各都市が事業に不参加であっても不問とすることを決めていることを踏まえると、特に日青協の側がそうした事態を嫌ったこともうかがえる。

日都青の組織構造については、日青協との連携が不調に終わった後も、それ以外の部分については先述の基本方針は維持されることとなった。また、各都市の参加については、都市ごとに青年団体の協議会の設置を促し、基本的に協議会単位での参加を求めたことが特徴だといえる（図1⁶⁷）。

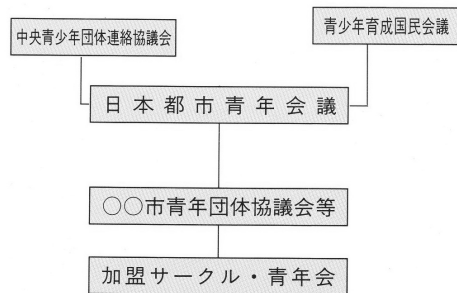


図1 日都青組織図

こういった形式をとったことで、都市単位での参加であることが明確に示されることとなり、自らが所属する地域を青年自身に自覚させる効果があったものと思われるが、その反面で協議会の下部に位置するサークルや青年会の実態について、日都青からは把握しづらくなるという弊害も起こった。実際に協議会以下の組織構成については都市ごとに大きく異なっており、1979年に日都青が行った調査では、単位サークルが直接市の協議会に参加しているものや、市内をいくつかの地区に分けて、そこで下位の協議会を設置しているもの等、様々な運用形態が確認されている。また加盟団体も各種サークルだけでなく、地区の青年団や青年学級、青年指導者たちの集まり等様々な性格を持つ団体が加盟しており、規模も数十人

から数万人とかなりの幅があり、一概に都市を代表する青年団体協議会であるといっても、その実態は都市によって大きく異なっていたことがわかる⁶⁸。

4.3 活動の内容

先述のように、初期の日都青では大会の他、海外研修と都市青年指導者研究協議会が主要な事業として位置づけられていた。また、1994年度からは青少年担当行政職員セミナーとして、行政職員を主たる対象とした会も全国規模で実施する等、様々に活動を展開していった。しかし、日都青の主要な議論の場となったのは大会と指導者研究協議会であり、次節以降もこれらの記録を参照しつつ検討を進めるため、ここでは大会と指導者研究協議会について概観する。

まず、最も重要な位置づけとなるのが全国大会である。全国大会は2泊3日の日程で開催され、会場は都市の持ち回りで毎年変えられた。会場を引き受ける都市は大都市ばかりではなく、例えば1974年の第5回大会は、当時の人口約32,000人の福井県勝山市で開催されたように⁶⁹、中小規模の都市でも行っていたことも重要な点である。大会の目的として、参加者同士の交流や、開催地となった地域の実情を知る事も含まれており、実際に開催地を見学するプログラムも何度も組まれていたことから⁷⁰、様々な特徴を持った場所で代わる代わる大会を開催することが望ましかったのであろう。

また、大会はそこに集った青年たちの学習や交流の場として位置づけられるとともに、長い準備期間を設けて青年自身が大会を開催・運営するということが極めて実践的な取り組みであるとされており、それによって各都市に様々なものをもたらすと考えられていた。具体的には、大会の実行委員会が母体となり、連合体組織が新しく設立されたといった事例や、実行委員の経験によって地域の青年団体のリーダーが育ったというものが言及されている⁷¹。例えば勝山市の場合は開催地を引き受けたことの効果について、翌年の大会で「昨年の勝山大会を機に勝山市における連帯的なその輪を大きくした遺産が残りました。過去、各団体が個々に活動し、連絡する機関もなかった非能率的なものを一本化し、機能的な交流促進をはかる意味で、『勝山市青年団体連絡会』も今年

四月発足いたしました。従来の連合体でなく、あくまで連絡協調体であり、それぞれの団体の自主性をのばし、責任転嫁、過重負担をなくそうとするものです”と報告しており⁷²、大会そのものが地域の青年同士のつながるきっかけとなったことに言及している。

もう一つの主要な事業となっていたのが、1977年から始まった指導者研究協議会である。これは五大市青年団体協議会が開催していた指導者講習会を前身とし、この指導者講習会が年に一回の大会だけでは十分な議論ができないという要求によって、日都青の事業に組み込まれたことで発足したものであった⁷³。指導者研究協議会も、全国大会同様2泊3日の日程で行われることとなり、これ以降は全国大会と指導者研究協議会の二つが、日都青の主な議論の場となっていくこととなる。

5 都市青年の集団化の理論

5.1 日都青の論点と想定される青年集団像

日都青における議論の内容について、日都青結成15周年記念誌である『あゆみ』では、いくつかの論点に整理している。そのうち、最初に取り上げられているのが、青年と社会参加の問題であり、そこで問われるのが、青年の社会参加の道筋をどのように構想するのかである。具体的な方法は数多く考えられ得るものであり、実際に「青年と福祉問題（第6回大会分科会）」「在学青年の社会参加（第7回大会分科会）」「ボランティアと青年活動（第8回大会分科会）」「青年と政治（第10回大会分科会）」など、毎回のように様々な切り口から社会参加の方策についての議論が行われてきている。そしてこれらの議論を下支えする概念として、「青年と町づくり」が位置づけられているのである。「青年と町づくり」は第1回大会の主題であるとともに、“最も基本的なテーマ”として位置づけられるものである⁷⁴。このテーマは第2回京都大会で掲げられた「未来都市創造のために青年の声を地域社会に反映させよう」というスローガンに引き継がれ、さらに「未来都市創造」という言葉はその後も大会テーマや分科会題目等で繰り返し使用されることとなる。したがって、ここでの社会参加とは、町づくりへの参加で

あり、青年の声を地域社会にどのようにして反映させていくかが問われることになる。福祉・ボランティア・政治といった、分科会で扱っていたテーマは、そのための具体的な手法についての検討の一環として位置づけられるであろう。また、高度経済成長期以降の急激な社会変化に対する言及も何度も為されており、それを前提としながら“青年は、自己の責任において「街づくり」のために積極的な役割を果たし”ていくべきだとされていることから⁷⁵、社会の変化に対応する形で青年の役割が求められると考えられていることがわかる。

また、この問題に関連して、日都青がなぜ青年の集団形成を重視するのかも、考察することが可能である。先述の通り日都青は都市ごとに青年団体の協議会を設置し、協議会単位で全国組織である日都青に加盟するという形式をとっている。したがって、多くの青年にとって日常的な活動の場であるサークル等の団体があるが、そこから協議会等に出て来るのは一部の青年のみとなり、日常的な活動の場としての単位サークルと、都市の協議会、さらには全国組織である日都青との間に、青年の意識のずれが生じるのである。これは先述の都市的な青年集団の課題とも関わるものであり、都市で青年が感じている孤独感への対応等、青年個々人の生活課題への対応を重視するのであれば、協議会等は不要とされかねない。実際に協議会が果たすべき役割とは何かについて、言い換えれば個々のサークル単位ではなく、青年集団全体に共有されるべき理念とはどのようなものかについて、日都青ではこうした文脈の上で繰り返し議論が行われることとなる。

議論の中では、“サークル（単位）での行事が多く、連協（筆者注・連絡協議会のこと）までとても手がまわらない”や“リーダーだけが連協を知っており、大切にしても会員まで伝わらない”といった意見も出されており⁷⁶、一部の中心メンバー以外には、他の団体との関わりがなぜ必要なのか理解されていなかったことがわかる。これに対し、当時の議論は“仲間を求め、心のよりどころを求める集団、それがサークルだ。エネルギーを一つの運動体に展開していく、それが連協だ”とし⁷⁷、社会全体の問題を見据えた運動を展開していくために協議会が必要だとまとめている。また、他にも“連協体の役割を、①単位サークルでは出来ないものを主催する。②情報交換の

場を設定する。③より大きな力として、行政等に働きかける”の三点に集約し、“各単サ（筆者注・各単位サークルのこと）をまとめあげる（組織化）ことにより、市をよくすること（地域）につながる”とした記録も残っている⁷⁸。

つまり、日都青が考える青年の集団形成とは、個人が集まるサークル単位の集団形成と、小規模な集団が集まり形成される協議会等のより大きな集団形成（以後協議会形成と表記）が不可分のものとして位置づけられているものなのである。“一人一人がバラバラに声をだすのではなく集合させて行動に移した方が効果も大きい。つまり、社会運動展開のためにも青少年団体は必要である”という記述に見られるように⁷⁹、青年たちが集まり大規模な組織を作るほどに、社会に対して働きかける力は強まると考えられていた。サークル等を結成し、さらにそのサークル等が集まり協議会を結成することによって、青年の持つエネルギーをまとめ、大きな運動としていくことで、地域改善につなげていくことが想定されているのである。ここに青年と社会参加という視点に結びつく論点があり、青年が社会参加をし、地域の創造に関わっていくための道筋として、集団形成・協議会形成が位置づけられているのである。

この他、日都青の大会や指導者研究協議会の場において頻繁に取り上げられた論点として、『あゆみ』では「青年と施設」や、「組織運営」があげられている⁸⁰。具体的な内容としては、「望ましい施設と指導者（第3回・第4回大会分科会）や、「青年と施設の管理運営（第8回大会分科会）」「あなたはそれでリーダーか（第9回大会分科会）」「リーダーは機関車なのか（第10回大会分科会）」といった大会での議論の他、「新しい指導者像を求めて（第1回指導者研究協議会全体主題）」のように、指導者研究協議会でも活発に議論されているのである。日都青に参加する青年は、各地で青年団体の取り組みを行っている存在でもあるため、こうした実践的な課題に関する議論に対する需要は大きかったであろう。これらは活動を行う場所の問題や、共に活動する集団に関する課題であり、したがって集団形成を前提としつつ、活動しやすい環境を整えるためにはどうすれば良いかを問うものであったと位置づけられる。

5.2 青年による集団形成の目的

日都青の想定する青年集団のあり方について、その目的が青年の社会参加であり、その実現のために集団形成・協議会形成が位置づけられていることはすでに確認した。社会参加が青年集団の中で共有される課題として位置づけられていることから、日都青の議論における青年集団の理念と社会参加が密接に関係していることがわかる。しかし想定される社会参加のあり方が不明瞭である場合、社会参加とはどのようなもので、なぜそれが必要とされているのかが問われることになるだろう。言い換えれば、都市の青年集団全体に共有されるべき理念の内実が問われることになったのである。

これについて日都青の議論では、青年の豊かな人格形成という目的からの必要性和、地域社会の改善に対する青年の貢献という目的からの必要性が、それぞれ主張されている。また、この二つは実質的に表裏一体のものとしてとらえられており、一方の達成のためにもう一方の実現が必要とされる構造となっている。“青少年の豊かな人格形成を図るためには家庭・学校・社会のそれぞれの教育が独自の機能を発揮し、調和を保ちながら連携を進めることが必要である。つまり生涯教育が必要なのである”という記述にうかがえるように⁸¹、青年たちが人格形成をするためには、どういった環境に身を置くかが重視されていた。そしてそのために、自身を含めた青年たちにとって良い環境となる、“新しい、住みよい都市をつくるには青少年はどう動けば良いのか”が問われているのである⁸²。また、青年が集まり、青年活動の問題のみならず、環境汚染・福祉・まちづくり・政治・交通等の様々な都市問題について議論し、それを社会に向けて主張することで、地域の発展に貢献することができるのであり⁸³、そうして地域社会の改善に資することが、青年自身にとって必要な環境を整えることにもつながると考えられていた。ここでは青年の人格を形成するために都市の環境が問われ、また都市の環境を改善するために青年の取り組みが問われるという、都市環境と青年との間の相互作用が課題とされているのである。ただし、“豊かさや、進みすぎた文明は、都市環境を悪化させ、青年の社会参加を拒んでいるように感じられる”という⁸⁴、現代社会に対する課題意識が根底にあるため、実際の議

論では主に青年から社会への働きかけが問われることとなっているのであろう。

社会参加を青年と都市の相互作用として描きだしている一方で、社会参加に関する日都青の議論では、常に都市や青年の持つ多様性が問題となり、目指すべき青年像や地域像はあまり明示されていない。言い換えれば、青年や社会のあり方に対する理念の内実とは、不明瞭なまま議論が行われているのである。ただし、“そのまちそれぞれの性格があり、地域性があるべき。(中略)そのまちを構成する人々が工夫してまちづくりをすすめることが大切です”という発言⁸⁵に表れているように、理念の内実を一般化して明示しないことで、むしろ青年による都市的な価値生成の重要性を主張する構造となっている。つまり、それぞれの地域性を前提としたうえで、地域ごとに望ましい地域像・青年像を、青年たち自身の取り組みによって見だしていくプロセスに価値が置かれているのであり、このプロセスこそが青年と都市の相互作用の意義としてとらえられていたのだと解釈できる。したがって、青年の社会参加とは、望ましい価値の実現のためのものというよりも、社会参加そのものが価値を創りだしていくものとしてとらえられていたのである。

ただし、このように論じると青年集団が大きな社会的使命を負ったものであり、そこに所属する青年たちが使命感から活動していたようにも捉えられかねないが、実態はそうではなかった。地域のサークルに所属する多くの青年にとって、サークル活動に参加し集団を形成するためには内発的な動機付けが必要であり、特にサークル活動の「楽しさ」が果たす役割の大きさについては、日都青の議論でもたびたび指摘されている。

また、こうした活動に対する動機付けの根幹の部分には協議会や日都青の大会に参加する青年たちにとっても変わらない。例えば、1986年の第17回横浜大会の記録では、大会終了後の参加者の寄せ書きを見ると“中華料理を食べに、また、近いうちに来たいです”や“早朝の赤レンガ倉庫は美しかった”といったものが多く、参加者たちが横浜観光を楽しんでいたことがうかがえる⁸⁶。また、サークル活動の楽しさについて論じた分科会の記録では、仲間や活動を求めて参加したサークルで、自己の向上や意識の展開を経験し、それによってグループの中で世話人的に行動することの喜びを知るという、集団内のリーダーとして

高まっていく経過が報告されており、また、この過程を支えているものがサークル活動の「楽しさ」であったと結論づけられている⁸⁷。こうした記述からは、小規模な単位サークルであれ、全国規模の日都青の大会であれ、そこに集る青年の多くは「楽しい」から参加していたという実態が見とれる。

そして“最初は自分たちだけの楽しみを求め、あえてつらいことに努力せずにいたが、個人の関心から集団の関心へ、さらに社会参加へと関心を広げていく必要を感じている”という参加者の記述に見られるように⁸⁸、活動を継続していく中で、次第に社会参加の意義について問い直す機会を得ることが想定されていたのではないだろうか。

6 おわりに

日青協の調査報告書で指摘されているように、高度経済成長期以降の都市青年の集団形成は、「理念」と「実践的方法論」の両面で課題となっていたと考えられる⁸⁹。日都青の議論は、この問いに対し、一定の回答を示したものとなったと考えられる。

まず「理念」に対しては、青年の人格形成や地域社会の改善につながる、青年と都市の相互作用として社会参加を位置づけ、社会参加の実践によって望ましい青年像・地域像が創りだされていくという、創造的な枠組みを提示したといえる。これは初期の青年概念における「近代精神」が、青年の生活に先立つものとして価値づけられていたことと対照的に、むしろ青年の生活から価値が生成されることを示したものであった。また、単位サークルと都市ごとの協議会、そして全国規模の日都青という三層構造をとったため、多くの青年の生活に密接に関係した単位サークルの意義と、個人の生活の範囲を超えた広域の協議会や日都青の意義を別個のものとして捉え、かつ相互に関連付けながら青少年の社会参加という目的に向けて再編するという観点が生み出されたことも、日都青における議論の特徴だと言える。これによって、都市における青年と地域社会との接点となり得る様々な要素についての検討が進められた一方、協議会等の広域の団体に関しては、日都青の議論の中でも“連協体の役割を議論する場合、ややもすると、非常に抽象的になるくらいが

ある”と指摘されている通り⁹⁰、多くの青年に理解されるよう提示できておらず、不十分な部分もあった。

また、「実践的方法論」に関しても、青少年施設や指導者の問題等の、活動に関わる青年にとっての共通の課題を抽出したことや、サークルの活性化につながる議論の場を繰り返し設けたこと等で、都市青年同士の仲間づくりをどのように進めれば良いかについて検討してきたという実績がある。そしてその中で、「まちづくり」のために青年と地域社会との相互作用が必要となることによって、同じ地域に居住する存在であれば、異なる背景を持つ青年同士だけでなく、多世代の様々な人々のことを無視し得なくなるのである。また、大会そのものを交流のための実践として位置づけ、楽しみながら全国の青年と仲間づくりができるよう、様々なプログラムを行ったことも注目される。日都青の一連の取り組みは、青年個人の内発的な動機付けを必要とする都市青年集団にとって、「楽しい」という感覚は実践の場への参加継続に大きな意味を持つものであることを明示したと言える。一方で、「楽しい」ことで単位サークルに加入した青年が、どのように協議会等の活動に関わるようになり、自覚的に社会参加を行うようになるかについては、具体的なプロセスは示されず、課題として残されている。

これらをまとめると、都市部の青年による集団形成は、青年と社会の相互作用としての社会参加を促進するものであり、そのための入り口として「楽しい」という感覚を基盤としながら多くの青年を巻き込んでいく仕組みであったといえるだろう。それは言い換えれば、自由であり、かつ孤独でもあるという都市青年の特徴を前提としながら、内発的な動機付けによるつながりの創出と、自身の取り組みによる価値の生成を両立させることで、都市空間の中で自らの人生を創りだしていく、主体となる方法を提示しようとしたものでもあった。

本稿は、高度経済成長期の都市青年像を概観しつつ、日都青を題材として、都市青年の集団形成にどのような意義が見出されていたのかについて検討した。ただし、日都青が全国規模の団体であったこともあり、そこで行われていた議論はそのほとんどがある程度一般化されたものであったといえるだろう。また、サークル等の組織化された取り組みだけでなく、より緩やかな青年同士

のつながりも、都市空間の中での青年の生活に大きな影響を与えていたことも示唆されているが、これについても言及することはできなかった。そのため、各地域で実際に活動する都市青年の実態を十分に検討することができなかったことは、今後に残された課題である。

青年たちの取り組みは、実際には都市ごとに小規模な青年団体の成立過程や分布が異なっているはずであり、都市ごとの協議会等の成立過程もまちまちであることが予想される。そのため、今後は一つ一つの都市の取り組みに丁寧に向き合い、都市青年が何を考えどのような取り組みを行っていたのかを明らかにすることが求められている。

注

- 1 上野景三 “青年教育史研究の課題と展望—青年団史研究を中心に—” 『日本教育史研究』第15号, 1996, pp. 111-130.
- 2 藤岡貞彦 『社会教育実践と民衆意識』草土文化, 1977, p. 126.
- 3 日本青年館調査研究室編 『都市化・工業化のなかの青年集団』日本青年館調査研究室, 1966, p. 12.
- 4 那須野隆一 『青年団論』日本青年団協議会, 1976.
- 5 田中治彦 “「子ども・若者と社会教育」の課題” 『日本の社会教育第46集 子ども・若者と社会教育—自己形成の場と関係性の変容—』東洋館出版, 2002.
- 6 那須野隆一 “青年教育研究の基本的視点” 『日本の社会教育第29集 現代社会と青年教育』東洋館出版, 1985, p. 5.
- 7 田中 (2002), *op. cit.*, p. 15.
- 8 日本青年館調査研究室編 『都市青年の実態調査—東京都大田区・名古屋南区—』日本青年館調査研究室, 1963.
- 9 那須野 (1976), *op. cit.*, p. 17.
- 10 日本青年館調査研究室編 (1966), *op. cit.*, p. 12.
- 11 久田邦明 “居場所づくりと青少年施策の課題” <日本都市青年会議編『子ども・若者・居場所～街が育てる ふれあい空間～』日本都市青年会議, 2001> p. 7.
- 12 日本都市青年会議編 『都市青年団体活動読本』日本都市青年会議, 1999.
- 13 日都青関係者の談話から。(2015年10月13日)

- 14 北村三子 『青年と近代 青年と青年をめぐる言説の系譜学』世織書房, 1998, p. 258.
- 15 日本都市青年会議編 (1999), *op. cit.* p. 110.
- 16 北村 (1998), *op. cit.*, p. 31.
- 17 田中治彦 『ユースワーク・青少年教育の歴史』東洋館出版社, 2015, p. 68.
- 18 北村 (1998), *op. cit.*, p. 37.
- 19 多仁照廣 『青年の世紀』同成社, 2003, pp. 32-34.
- 20 木村直恵 『<青年>の誕生 明治日本における政治的実践の転換』新曜社, 1998, p. 24.
- 21 北村 (1998), *op. cit.*, p. 51.
- 22 *Ibid.*, p. 98.
- 23 多仁 (2003), *op. cit.*, p. 42.
- 24 *Ibid.*, p. 13.
- 25 *Ibid.*, p. 45.
- 26 山本瀧之助 『田舎青年』山本瀧之助, 1896 (小川利夫・寺崎昌男監修「近代日本 青年期教育叢書・第I期 第1巻」収録) pp. 2-3.
- 27 多仁 (2003), *op. cit.*, p. 45.
- 28 木村 (1998), *op. cit.*, p. 141.
- 29 北村 (1998), *op. cit.*, p. 258.
- 30 多仁照廣 『若者仲間の歴史』財団法人日本青年館, 1984.
- 31 安藤耕己 “若者の「居場所」へのまなざし—史的考察—” 田中治彦・萩原建次郎編 『若者の居場所と参加 ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版, 2012, p. 75.
- 32 佐藤守 『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房, 1970.
- 33 北村 (1998), *op. cit.*, p. 258.
- 34 山本 (1986), *op. cit.*, p. 52.
- 35 多仁 (2003), *op. cit.*, pp. 46-47.
- 36 山本滝之助 『地方青年団体』洛陽堂, 1909 (小川利夫・寺崎昌男監修「近代日本 青年期教育叢書・第III期 第1巻」収録) p. 93.
- 37 北村 (1998), *op. cit.*, pp. 259-260.
- 38 山本 (1986), *op. cit.*, p. 52.
- 39 田中 (2015), *op. cit.* pp. 109-110.
- 40 多仁 (2003), *op. cit.*, p. 50.
- 41 矢島正見 『【改訂版】戦後日本青少年問題考』学文社, 2013, p. 92.
- 42 総務省統計局 「国勢調査結果」より。
- 43 小平市教育委員会 『小平の社会教育』小平市教育委員会, 1969, p. 2.
- 44 菊地史彦 『「若者」の時代』トランスビュー, 2015, pp. 74-75.
- 45 日本青年館調査研究室編 (1963), *op. cit.*, p. 45.
- 46 菊地 (2015), *op. cit.*, pp. 81-83.

- 47 小川利夫・高沢武司編著『集団就職』明治図書出版, 1967 (日本図書センター「日本現代教育基本文献叢書 社会・生涯教育文献集IV-32」収録) p. 49.
- 48 日本青年館調査研究室編 (1966), *op. cit.*, p. 73.
- 49 菊地, *op. cit.*, p. 96.
- 50 日本青年館調査研究室編 (1963), *op. cit.*, p. 7.
- 51 *Ibid.*, pp. 95-98.
- 52 日本青年団協議会編『都市青年団体の実態調査—千葉県柏市及びその周辺都市を中心に—』日本青年館, 1969, pp. 98-100.
- 53 *Ibid.*, p. 98.
- 54 日本都市青年会議『第4回指導者研究協議会テキスト 80年代と青年活動 みなおそう! グループ活動 君の会は生き残れるか?』日本都市青年会議, 1980.
- 55 日本青年団協議会編 (1969), *op. cit.*, p. 18.
- 56 日本都市青年会議編 (1999), *op. cit.*, p. 110.
- 57 *Ibid.*, p. 111.
- 58 日本都市青年会議記念誌「あゆみ」編集委員会編『日本都市青年会議 記念誌「あゆみ」』日本都市青年会議, 1985, p. 112.
- 59 *Ibid.*, p. 134.
- 60 日本都市青年会議編 (1999), *op. cit.*, p. 113.
- 61 日本都市青年会議記念誌「あゆみ」編集委員会編 (1985), *op. cit.*, p. 137.
- 62 中央青少年団体連絡協議会『日本の青少年団体—第1集—「中央団体編」』中央青少年団体連絡協議会, 1985, p. 250.
- 63 日本都市青年会議編 (1999), *op. cit.*, p. 114.
- 64 *Ibid.*, p. 113.
- 65 中央青少年団体連絡協議会 (1985), *op. cit.*, p. 250.
- 66 日本青年団協議会『地域青年運動50年史 つながりの再生と創造』日本青年団協議会, 2001, p. 67.
- 67 1987年作成の日都青パンフレットより抜粋。
- 68 日本都市青年会議『都市青年団体活動の実態調査 (速報版)』日本都市青年会議, 1979.
- 69 日都青では都市を「人口3万人以上の自治体」と定義しているため、勝山市は小規模な都市という扱いになっている。
- 70 横浜市青年団体連絡協議会編『国際青年年から国際平和年へ 宇宙船地球号 今,そして未来へ』横浜市青年団体連絡協議会, 1987, p. 39.
- 71 第10回日本都市青年会議報告書編集委員会編『君たちは満足か』第10回日本都市青年会議東京大会実行委員会, 1979, p. 63.
- 72 神戸市青年団体協議会編『“心のふれあい” 第6回 日本都市青年会議 報告書』神戸市青年団体協議会, 1975, p. 20.
- 73 日本都市青年会議記念誌「あゆみ」編集委員会編 (1985), *op. cit.*, pp. 141-142.
- 74 *Ibid.*, p. 16.
- 75 *Ibid.*, p. 113.
- 76 第10回日本都市青年会議報告書編集委員会編 (1979), *op. cit.*, p. 14.
- 77 *Ibid.*, p. 14.
- 78 *Ibid.*, p. 35.
- 79 日本都市青年会議編『第7回指導者研究協議会報告書 都市における青年集団活動の活発化をめざして』日本都市青年会議, 1983, p. 55.
- 80 日本都市青年会議記念誌「あゆみ」編集委員会編 (1985), *op. cit.*, pp. 116-123.
- 81 神戸市青年団体協議会編 (1975), *op. cit.*, p. 12.
- 82 *Ibid.*, p. 12.
- 83 第10回日本都市青年会議報告書編集委員会編 (1979), *op. cit.*, p. 64.
- 84 日本都市青年会議記念誌「あゆみ」編集委員会編 (1985), *op. cit.*, p. 112.
- 85 第10回日本都市青年会議報告書編集委員会編 (1979), *op. cit.*, pp. 46-47.
- 86 横浜市青年団体連絡協議会編 (1987), *op. cit.*, p. 67.
- 87 *Ibid.*, p. 10.
- 88 第10回日本都市青年会議報告書編集委員会編 (1979), *op. cit.*, p. 36.
- 89 日本青年団協議会編 (1969), *op. cit.*, p. 18.
- 90 第10回日本都市青年会議報告書編集委員会編 (1979), *op. cit.*, p. 34.

**The Significance of Group Formed by Urban Youth:
Focusing on Activities of Urban Youth Association of Japan
since the 1960s in the 1980s**

Hiroshi OYAMA †

†Graduate School of Education, the University of Tokyo

The purpose of this study is to examine the significance of group formed by urban youth of the time period of high economic growth. Urban Youth Association of Japan continued with discussion about the significance of group formed by urban youth since period of high economic growth. In this study, I examined the contents of the discussion about need for urban youth group on the basis of the record of Urban Youth Association of Japan. As a result, it is revealed that urban youth of the time period of high economic growth defined group forming as something to promote social participation, and they thought that they can build a desirable regional image and a desirable youth image on their social participation.

Keywords: Urban Youth Association of Japan, Urban Youth, Group Forming, Social Participation